



おすすすめの一冊

三木成夫『胎児の世界——人類の生命記憶』

胎

児は、十月十日の間、母親のお腹の中でいったい何を聞いて過ごしてきたのであろうか。それは、絶え間なく響く母親の血潮のざわめき、潮騒である。子宮の壁をザーザーと打つ大動脈の拍動音、小川のせせらぎのような大静脈の摩擦音、そして何か宇宙空間の遠いかなたに消えていくような深い響きだ。銀河星雲の渦巻きを銅鑼にして悠然と打ち鳴らすような…。これが「いのちの波」の象徴なのか。生の拍動のこれが根源というものか。

母体のこの血管音が最初に録音されて10年以上経つ。近代の自然科学は、何人ものぞくことの許されなかった神秘の世界に情け容赦なくその足を踏み入れてしまった。

「母なる海」の追及をめざした本書は、1983年5月に発刊された。著者である三木成夫博士は、東京大学医学部を卒業し、解剖学教室に入局。東京医科歯科大学解剖学教室を経て、東京芸



中公新書
691

胎児の世界
人類の生命記憶
三木成夫
中公新書

術大学教授・同保健センター所長を歴任されている。

私たちのからだの内には、いつしか遠い生命記憶の断片が朝もやのように広がっている。それは、この身体がまだ母の胎内にいた頃のことか。鼻から羊水を吸い込んでいたあの時代から、私たちは四六時中、夜も昼もなくこの

音を聞き続けてきた。全身の肌をもつて、この羊水の振動を受け止めてきたのだ。

母体の中で小さな胎児が何かを思い出したように、突然、足を引っ張り、からだをくねらせ、時に指しゃぶりを始める。そんな時、彼らは何の夢を見ているのだろうか？

生まれて間もない赤ん坊が、眠っているうちに突然におびえて泣き出した。または何かを思い出したようにニコリ笑ったりするのを、私たちはいつも見ている。それは他でもない、母の胎内で見残した夢の名残を見ているのではないか？

羊水に満たされた暗黒の空間の中で繰り広げられる胎児の世界——それは人類永遠の謎としてベールのかなたにそっとしまっておくべき世界なのかもしれない。

人間社会には「見てはならぬもの」が存在する。母体の世界はその最も厳粛なものひとつである。そこに展開される光景がどんなものであろうとも、やはりそれは、永遠の神秘のかなたにそっとしまっておくというのが、洋の東西を超えた人情の常ではないだろうか。

さあこれから「胎児の夢」のめぐる旅に一緒に出かけてみませんか？

山田 正興

やまだ まさおき
一般社団法人
東京産婦人科医会会長

1979年日本医科大学大学院医学研究科卒業。
山田医院院長。前中野区医師会会長。元中野区教育委員会教育委員。2019年6月より現職。本会理事。